

8/14 ^{こぼくあん}古木庵で行われた
久良の「^{のうざん}能山踊り」

久良地区真浦の古木庵で愛媛県指定無形民俗文化財の「久良の^{のうざん}能山踊り」が行われました。

この踊りは、戦国時代末期に南宇和地方を領した^{かじゅじ}勸修寺左馬頭基賢（別名能山公）が、土佐の長宗我部氏との戦いに敗れて久良の地に逃れ、当地で没したため、その能山公の霊を慰めるために始まったと伝えられています。毎年7月31日から8月13日にかけては古木庵で夜に踊り、最終日の8月14日は朝から久良漁協と古木庵で踊ることが近年の習わしとなっています。

この日は悪天候だったため、古木庵内で踊りが行われました。踊り手3人と太鼓叩き1人、歌い手1人が参加し、全員が浴衣を身に付け、太鼓のリズムに合わせて歌詞が書かれた扇子を見ながら歌い、ゆったりとした動きで踊りました。

保存会世話人の^{てるふみ}鎌田輝文さんは、「雨が降ったのは残念だったが、今年は新しい仲間も加わり踊ることができて良かった」と話しました。



8/18 ^{あんようじ}安養寺で行われた
増田の「はなとりおどり」

増田地区の^{あんようじ}安養寺で、愛媛県指定無形民俗文化財の「増田のはなとりおどり」が行われました。

400年以上の歴史を持つとされるこのおどりには3つの意味があると云われ、一つ目は安養寺の堂宇の中に祀られている^{たか}高山尊神という神様の供養、二つ目はその昔大イノシシが村に現れて百姓の作物を荒らした際、村人を救うために犠牲となった、ちよぼし弥三郎兄弟への感謝と供養、三つ目は地区の安全と供養とされています。

この日はあいにくの雨だったため、安養寺の本堂の中で踊り子6人、鉦叩き3人、太鼓叩き1人が息の合った踊りを披露しました。

はなとりおどり保存会の^{しょうじ}近田正二会長は、「今年は新型コロナウイルスの影響で準備が難しかった。来年コロナが収まったら踊り手を増やし、例年通りに人を呼んで盛大にできるようにしたい」と話しました。



愛媛
CATV
動画